

NHK・FM タベのひととき「働く女性」シリーズ

愛の泉 ゲルトルト・エ・キュックリヒ「ママ」

放送日不詳

これは、愛の泉の関係者から提供いただいた録音テープ（いわゆるオープンリール）に録音されていた、キュックリヒ女史へのインタビューである。放送日などは記されていないが、左記のタイトルがケースに記されていた。話の内容から判断すると愛の泉のエリザベツ・ハウスが完成した翌年と思われるので、一九七四年のことであると思われる。また途中子どもたちの声が聞こえてくるので、録音されたのは愛の泉のいずれかの場所と推測される。

アナウンサー…新しい建物が出来たのですね。

キュックリヒ…はい。それは私共は昨年いただきました。ただ、下には、一階には老人ホームのホール、全体愛の泉の集いの大ホールと、それから二階は愛の泉の家庭生活をしておられる方のアパートと、三階には独身職員のお部屋がございまして、大変よかったですと感謝しております。実は私共は同じ場所に古い寄宿があったのですが、これが本当にバラックのようなひどい建物でありまして、加須市の消防署にも、叱られて、戒められて、早く防火建築、そこに直してください、と言われて、けれども、こういう大きい建物を建てるということはどうしてもできないと思ひまして、そして埼玉県庁、自転車振興会と、それからまた加須市と、市町村関係のところとから、また国際婦人団体等、みんな私たちを助けて、ほんとうに私は「来日」五〇年になるので、みんなよろこんで何とかして下さり、そして名前にまでこの建物は、ゲルトルト・キュックリヒ、エリザベツ・ハウスという名前をいただいて「キュックリヒ女史のもうひとつの名前がエリザベートで、エリザベツはその英語読み」、大変立派な、新しい最高の設備を与えられています。

アナウンサー…日本に住み始めてちょうど五〇年ということの記念として、とっても素晴らしい贈り物だったわけですね。

キュックリヒ…そうでございます。

アナウンサー…この加須市の方に来られたのは終戦直後だったのですか。

キュックリヒ…ちょうど戦争の終わったその時でした。岡安「正庫」さんのご紹介で、建物もないし、住むところもないし、いよいよ今度は人を助けるといいう仕事を、手つなぎをよくして、ぼくの故郷でいたしましょうと、それから私はこの土手の脇にありますこの土地に導かれたのであります。まあ、私はどちらかといいますが、都会の娘、都会育ちの子どもであったのですから、何も田舎のこと知らないで、畑のことも分かりませんし、植物のことも、たとえば愛しておって何も農業のことはひとつも知らないで、えー、寂しい思いをしまして、加須駅

に降りて、さあこれからその新しい所まで歩くに、右に左に畑ばかり、農家ばかりで、さあ、その農家の脇からひとりのおじいさんが出てきました。「ああ、新しい先生ですか」。私は「そうであります」。「ああ、ちよつとまっつてください。今、ちよつどきれいな花が咲いていますから。それじゃあこれから、ひとつお花をあげましょう」。それからおじいさんは一番きれいなお花を切って下さいまして、私は寂しかったけれども、私はああいうふうに、あたたかい心をもって私を歓迎して下さったその加須の方に、名前も知らない加須の方に歓迎されて、それから美しい花をもって、はじめて加須の自分の部屋に入ることが出来ました。

アナウンサー…で、この加須に来られてから一番最初にした仕事と言えばやはり、戦争の被害にあった子どもたち……

キュックリヒ…ええ、それは私たちは、あのう、あるいはこちらの警察によって、あるいは近い所の駅に、まあ、そこに姿が出て来たと、まあ、戦災孤児ですね、戦災孤児をお招きして、そして連れられて、子どもと一緒に住んでおりました。本体であったあの古い建物の中に、私たちは愛の泉の最初の時、過ごしたのであります。

アナウンサー…まあ、当時は戦災孤児が多く、また混血児の問題が出てきましたでしよ。

キュックリヒ…はい。それはそうでありました。それは、まあ、約一年間くらい経つてから、塀の後ろにですね、またどこか駅の脇に、ガードの下とか、いろいろなところに、まあ、困った方たちだったと思います。自分には育てられない、この混血児が置いてあったと、それからまた、私どもができるだけ、この子どもたちのために尽くして、村のお医者さん、また村長さん、えー、警察の方々、どんなに夜遅くても、とつてきて、それから、一分間でも損しないように、私たちの子どもたち育てられるように、協力して、多くの子ども助けられ、後から混血児たちができるだけアメリカの家庭が与えられるように努力して、大変忙しい時でありました。

アナウンサー…その子どもたちも今はもう、立派な大人になって、えー、ハガキなんか来たりすることもありますか？

キュックリヒ…そうですね。その子どもたちは、今もうアメリカで、まあ、ハイ・スクールですね、高等学校を卒業して、大学にいる子どもたちは多いのでありますね。そして私に手紙書いて、ママさん、どうぞぼくの卒業式、えー、またある者はぼくの今度働いているところいらしてください、今度はおじいさんは、私のエンゲイジメント・パーティーに、婚約パーティーにいらしてくださいと、こういう素晴らしい手紙を今でもたびたびいただくのであります。

アナウンサー…あーそれは、やはり苦労なされた甲斐があったと、いうことですね。

キョックリヒ…そうですね。

アナウンサー…それで、戦争が終わって、加須にいらっしやる前は、東京ですか？

キョックリヒ…前は、私はずっと、鐘ヶ淵に住んでおられて、それから鐘ヶ淵が焼けた後で、ごく短い時期でありましたが河口湖畔のすぐそばで、戦争が終わるのをまつておられたわけです。それからすぐ、占領軍のゆるしをいただいて、それから岡安さんに迎えられる、加須のほうに行かれたのであります。

アナウンサー…その鐘ヶ淵の頃はどのような仕事をなさっていたのですか。

キョックリヒ…鐘ヶ淵の時私はまあ、最初から、まずまあ言葉を学ぶと、それから私どもの専門である幼児教育の保育者養成のその道を歩んで、それから週に二、三日教えて、それから教会のお仕事をして、鐘ヶ淵幼稚園、鐘ヶ淵託児所、また母の会の働き、また鐘ヶ淵の紡績会社の中に女学校がございました、この女学校の女工さんたちに、育児とかいろいろなお話をして、教えたこともずいぶんございました。非常に忙しかったです。

アナウンサー…ずいぶん張り合いのある生活だったのですね。

キョックリヒ…そうですね。非常に楽しかったのですね。そこで、私は本当に、今日の愛の泉の大きい働きをするに對して、ずいぶん人と交わることと、また人を指導することと、また人によつて学ぶことがずいぶん多くあったから、本当に鐘ヶ淵時代に感謝していて、よい思い出いっぱいあります。

アナウンサー…ああ、そうですね。あのう、まあ鐘ヶ淵のお仕事に入る前に、キョックリヒさんは関東大震災に合われているのですよね。

キョックリヒ…それは、ごく初め頃でしたね。あの、宣教師は、日本に着きます時に、すぐ、その日本語学校に通わなければなりません。やっぱり決まったコースに従って、日本語を学ばなければなりません。それで、一年いたしまして、ちょうど九月に関東大震災にあつて、そして、そこで学校はあとで関西の方に行きましたけど、私は関西にいかなくて、東京に残って、そして、いろいろ日本にある幼稚園教育とか保育者教育とか、そういうこと研究しようと思いましたが。けれど震災のすぐ後で、私は少しばかりお仕事、社会事業をいたしました。それは、あそこの、東京の東側から出た多くの、深川とか本所あたりから来ました人たちのために、鐘ヶ淵の私共の行ったところの教会と幼稚園のあるところで給食いたしましたですね。多くの方々に、毎日、おいしい食べ物を作って、そして困らないように、長い列のみなさんの前に立って、配るといふことは、まだ言葉の力はひとつもなかったけれども、まあ、スマイルをもつて、味をもつて、みんなのために楽しく給食の事業をいたしました。それが社会事業の最初でありました。

アナウンサー…しかし、その日本にいらしてから一年ほどで、そうした関東大

震災という大きな災害があったわけで、だいぶショックが大きかったのではないですか。

キュツツリヒ…ええ。それは大変でございました。それはまた、やっと、やっと一年間の難しい日本語勉強して、失敗から失敗へと、歩いてまいりまして、えー、それからまだまだ十分に理解も、また関係も深かったわけじゃないんですから、そういういろいろ重大なることを体験しまして、大変なショックでございまして、最初に、それでは私のようなものは何でこちらにこられたのでしょうかと、こちらに私のようなものは用事があるのでしょうかと、あれだけの努力、あれだけの勉強、あれだけのことがいいだろうかと、大変心の中にショックとまた、迷いもちよつとあったように思いましたけれども、そうばかりではないのです。それは私は、よく話す話ですが、私は本当に関東大震災の恐ろしさの中で、自分の苦しみ、自分の迷いに対して、私は答えと解決を与えられた、と。個人としては、震災だとか火事だとか、そういう恐ろしいことは経験したことがなかったけれども、私の若い人生にも大きな苦しみはあったと、それは私は世界の第一戦争の時に、輝かしい希望のあった若い青年「の」一員でありましたと、それから私はよい家庭の主婦となり、素晴らしいお母さんになろうと大変理想が高かったけれども、私のもつとも愛する、また私を愛して下さるその尊い友は、戦争の時に、国のために、私のために、尊い命献げられたのであります、戦死されたのでありますから、私は、もうどうすればよいかと、ただただ私にはその時には、神さまは人間を愛して、人間に対して間違えはしませんと、それは私はよくわかりましたけれども、でもその時に私はどうしていいのかと、二度目の結婚とか何か考えたくなかったけれども、お父さんが、あなたはひとりで立つならば、もつともつと勉強しなければなりません。そうして私は教育大学校に通うことができまして、幼稚園の教諭、そういう保育者を育てるということ、私は導かれて、勉強しまして、そして卒業して、そしてそこから私は、そういうような専門であるなら、ちやうどいま日本には、盛んに幼児教育をするということになって多くの教会にも、多くのところに、幼稚園建てたいということがあって、また、私の父を通して、教会本部によって聞かれて、はじめなかなか行きたくなかったですけども、またドイツにあとからよいポディションとれるように言ったこともあったけれども、やっぱりだんだんわかかって自分の行くべき道は、それは遠いところ、この日本であるということ、そこは疑いがなかったと、ただ本当に若い不安と、苦しみと、また心に残っておった悲しみがいっぱい、いっぱいでありました。

アナウンサー…そうして日本にやってきて、本当に一年でああいった関東大震災ということ、ねえ。

キュツクリヒ…で、そこで、一年の体験で、私は楽しく給食しようと思ひ通い

ましたが、そこで尊いことを与えられたと、いわゆる、あの現場の方々、その焼野原に立ち返りまして、そこにあるものを使って、小屋を建てて、また他の道具も何もなくても、その中に帰ってくると、ああ自分の苦しみの跡から逃げるのではなく、自分人生これからまた新しくしようと、そのことは非常に感心して、でもそればかりでもなく、この方々は、自分の家の前で小さな何かの箱やドラム缶の中に少し種を入れて、それから花を咲かせて、それは朝顔の花でありました、美しい花いっぱい向島の焼け跡の上にあったと、そのお花みると、私は日本の人は、私に教えて下さったと、あなたの涙の上に、花を咲かせようと、そして積極的な態度をとれと、この失敗した、苦しかった、また寂しかったそのことを下にして、それからその上に、神さまの恵みに導かれたままで、どうぞ若いけれど、立派になって下さいと、私は大きな励まし与えられて、そして実は、今私は、ひと月前にいただいた、その長い長い間の憧れである日本に永住という、そのひとつの大事なこと、私はその時憧れを与えられたと、ああ、この日本に、ああ、この花咲かせる日本、これが私の一生の歩むべきところである、ここが私の土になることにしたほうがいいなど、そう思っています、今日恵まれて、また人のあこがれる希望も応えられて、幸福に過ごしをしています。

アナウンサー…ああ、去年の一二月の六日でしたか。

キュックリヒ…そうです。六日でした。

アナウンサー…永住許可を認めるということになったわけですね。

キュックリヒ…そうです。ありがとうございます。

アナウンサー…ああ、その関東大震災の時に被害にあわれた方々が、悲しみの上に朝顔の花を咲かせたということとは、ちょうどキュックリヒさんが、あの大事な結婚の約束をされた方を亡くした悲しみの上に、やっぱり花を咲かせなければならぬのだという決心を、日本人たちが与えてくれたということなんですね。

キュックリヒ…その通りでございます。まあ、七六歳の人ですから、ええ、若いあの時と違った、そう大きいことをこれからしようとか、できるだろうとか、そういうようなことが、もう終わりましたけれども、多くの方々に、愛されて、親しく一緒に住んでおられて、導かれて、守られて、今何らかのこともなく、ええ、まあ、少しづつ気を付ければ、私は、まあ、今のところで、軽く、自分に与えられた仕事を果たしながら、幸福な暮らしをしています。

アナウンサー…どうぞいつまでもお元気で過ごしていただください。

キュックリヒ…はい、ありがとうございます。そういたしたいと願っています。

アナウンサー…どうも今日はありがとうございました。

キュックリヒ…ありがとうございます。